

あるむぜお90

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 90

2009年12月20日



アンドロメダ銀河 撮影：宮崎秀公（FAS 府中天文同好会） 撮影地：静岡県朝霧高原

目次

1-2 シリーズ 世界天文年

③銀河の発見

3 展示会案内

特別展 発掘！府中の遺跡

4-5 ノート江戸時代行路行倒人事情

6 坂本長利「土佐源氏」資料の世界 ③

7 最近の発掘調査

L字形をした珍しいカマドを発見！

8 小説 探鳥物語 ③ 冬の来訪者たち



1609年、ガリレオ・ガリレイが人類初の望遠鏡による天体観測を行ってから今年で400年。それを記念して2009年は全世界を通じて「世界天文年」と定められています。当館でも関連の天文イベントがいくつか予定されているとともに、本紙の表紙シリーズでまつわる話を連載していきます。

③銀河の発見

ガリレオ・ガリレイが望遠鏡を宇宙に向けた頃に比べると、星を見る環境も機器も変わってきました。イタリアのフローレンス科学博物館所蔵のガリレオが使用した望遠鏡は、口径 2.6cm、倍率 14 倍という、かなり小さなものです。日本を代表する「すばる望遠鏡」と比較すれば、口径 315 分の 1、面積約 10 万分の 1 で、大変なよりなく感じますが、確かに宇宙の扉を開いたのです。

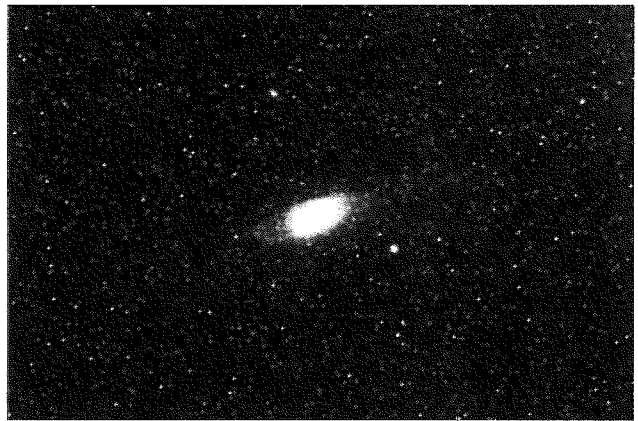
右写真は、当館で撮影したアンドロメダ銀河の様子です。とても表紙の写真（同じ範囲に調整）と同様の天体には思えません。府中近辺では、銀河のバルジと呼ばれる中心部分が見えるだけで、渦巻銀河の特徴である腕の部分は確認できません。ガリレオの時代に近い澄んだ星空と、現代の明るい空ではこれほどに違うのです。

そもそも銀河は、星雲と呼ばれる天体のひとつです。100 年以上前では、遠いのか近いのか、どんな性質の天体なのか全く分かりませんでした。それが、望遠鏡の大型化や写真技術、光の色（スペクトル）を細かく分ける分光学の進歩などによって、星雲の一部（銀河）のスペクトルが恒星のそれと同様である事実などが明らかになってきました。

また、1913 年には初めて近傍銀河までの距離がわかりました。1838 年にドイツの天文学者ベッセルによって恒星までの距離測定が成され、近い星の距離が続々と決められていきましたが、1913 年、ある種の変光星の性質を利用してついにマゼラン星雲までの距離が求められたのです。この天体は私達の銀河系、つまりは天の川の外にあることもわかりました。

その当時は、多くの銀河（当時は星雲と呼ばれた）が天の川近くに散在するものと大半の天文学者が考えていました。1920 年には、アンドロメダ星雲が天の川の中にあるのか、あるいは外にあって、天の川と同じような星の集団なのか、といった大論争も行われました。時を同じくして、やがてこの大難問に決着をつけることとなる一人の法律家が天文学の勉強を始めていました。現

在では、宇宙に浮かぶ望遠鏡の名前で有名なエドウィン・ハッブルその人です。彼は 1923 年、アンドロメダ星雲の距離を導き出し、天の川の大きさを遥かに超えることを確認しました。その後、さらに複数の銀河の距離を求め、どれも天の川の外に位置し、星雲の中の一部が銀河であると



アンドロメダ銀河
筆者撮影 撮影地：府中市郷土の森博物館付近

いうことを立証しました。宇宙は、誰もが想像し得なかったほど広く、銀河という大きな天体で満ちていることが分かったのです。

20 世紀前半に比べ、現代の望遠鏡はさらに大きく高性能となり、写真フィルムに変わる CCD などの観測機器の進歩で、より多くの情報を収集しながら、真の天体の姿に迫ることが可能になってきました。例えば、暗くて小さい銀河のスペクトルさえも調べることができ、その中にはとても遠くにあるものが含まれていることが分かってきました。

2006 年にすばる望遠鏡は、約 129 億光年彼方の銀河を観測しました。これが今でも最遠の銀河として記録されています。望遠鏡で遠くを見れば見るほどその星の昔の姿を見ていることとなります。この銀河が最遠ということは、最も若い銀河を見ているということです。宇宙の年齢を 137 億年とすると、宇宙誕生から約 8 億年前の姿になります。ガリレオが宇宙に目を向けて 400 年、銀河の誕生や進化について説明できる材料がようやく揃いはじめました。（本間隆幸）

国府はいつできたか & 調査速報

2010/1/23 (土) ~ 3/7 (日)

府中は、古代に武蔵国の国府が置かれた伝統あるまちです。しかし、ひとくちに古代の国府と言っても、遺跡の実態は多様です。政治を執り行う中、枢的な役所としての国庁や、官庁街とも言うべき国衙があり、さらにその周囲に広がる広大なマチの空間には、都から赴任してきた国司たちの居宅や、寺、社、そしてさまざまな手工業生産の工房などがあり、これらを支えた人々の暮らしの場が広がっているのです。国府はけっして役所のみで成り立っているのではなかった、と言えるでしょう。

こうした国府の実態は、すべて長年の発掘調査によって明らかになってきた事柄です。特に、府中市で進められている古代国府の発掘調査は、全国的にも注目される内容で、国府研究の上でも重要な役割を果たすまでになっています。市民の協力のもとで進めてきた武蔵国府の発掘調査は、確実に実を結んでいるといえるでしょう。

こうした実績もあって、本年7月、国府の中核施設である国庁を含む国衙の一角が「武蔵国府跡」として国の史跡に指定されました。すでに現地の一部は史跡として整備されていますが、いにしへの武蔵国府に思いをはせることのできる、そして府中の豊かな歴史を全国に発信する場ができたと言ってよいでしょう。

さて、このように全国的にも国府研究をリードする立場にある武蔵国府ですが、発掘調査をすれば新たな事実が判明する一方で、新しい疑問や課題も生まれているのが実情です。

今回の展示では、そうした課題のひとつである「国府はいつできたのか？」に焦点をあててみようと思います。一般に、国府の成立というと、国庁や国衙といった役所がいつできたか、が話題



井戸跡から出土した土器
マチの暮らしを支えるため、井戸はいち早く掘られた

となりやすいようですが、国府は役所だけで成り立っている訳ではありません。その点、府中市ではその周囲に広がる広大なマチも発掘調査の対象としてきましたので、マチがいつ、どのように姿を現すのかと言った側面からのアプローチもできるのです。こうした特徴を活かして、展示では、役所の成立とマチの成立という2つの側面から、国府の成立を考えてみようと思います。

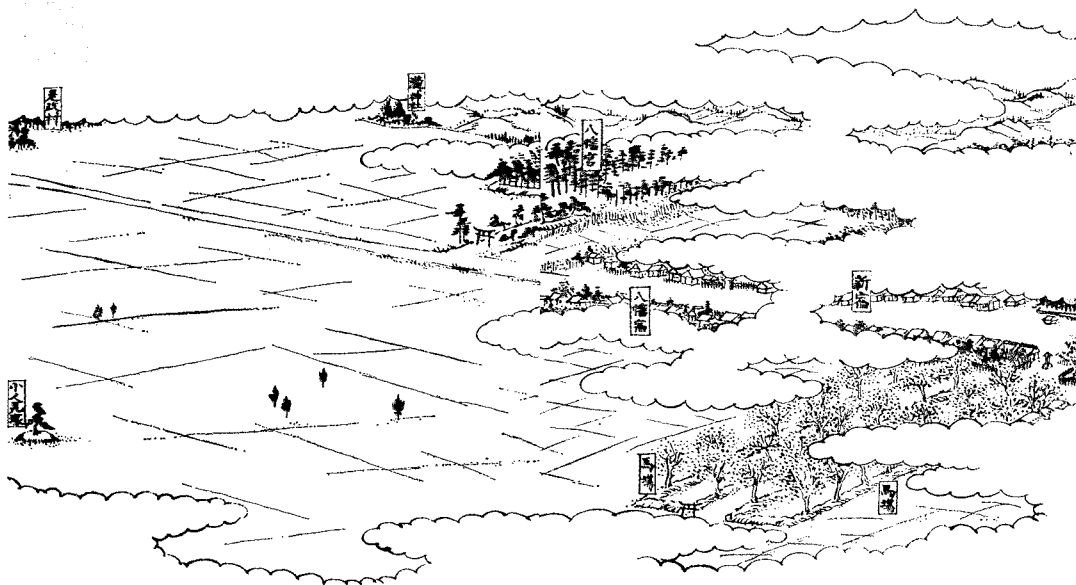
時は西暦700年前後、まさに古代国家の成立期に相当します。古代国家が地方の統治をどのように推し進め、地域ではそれをどのように受け止めたのか。激動する時代を、武蔵国府という遺跡から垣間見る試みでもあります。

あわせて、昨年度に市域で実施された発掘調査のうち、主要な調査成果を展示します。こちらは、縄文、古墳、奈良・平安、中世と、さまざまな時代の遺跡・遺物の紹介です。 (深澤靖幸)

江戸時代行路行倒人事情

—八幡宿村の場合—

②療養と仮埋葬



『武蔵名勝図会』 多摩郡之部 卷三 府中宿

『あるむぜおNo. 83』において「江戸時代行路行倒人事情～八幡宿村の場合 ①発見から吟味まで」と題して、当館に寄託されている大國魂神社文書に記された八幡宿村の事例から、江戸時代に旅先で行倒れとなった人の発見と調査について紹介しました。

八幡宿村は府中宿を構成する3町（本町・番場・新宿）の1つである新宿の東に位置する村で、六所宮（現大國魂神社）の社領でした。このため、六所宮に参拝に訪れて行倒れた人の対処も八幡宿村で行っていました。

大國魂神社文書の中には安永7年（1778）から安政5年（1858）まで、15件の行倒人に関する記述があります。村内に行倒人があったとき、大変なのは行倒人の国元への連絡や支配役所への届出だけではありません。病人は医師に見せ、症状が重ければ、村内で療養させなければなりません。行倒人が死亡していた場合は、村内に仮埋葬する必要が生じます。八幡宿村では、このような事態にどう対処していたのでしょうか。

今回は『あるむぜおNo. 83』の続編として、八幡宿村での行倒人の療養と仮埋葬について紹介したいと思います。

▼ どこで療養させる？

まず、病人の療養についてみてみましょう。村内で病人を療養させるためには、収容場所と看病に従事する人が必要になります。

江戸の町では、無宿（宗門人別帳から外された人）の行倒人は浅草と品川にあった溜という療養所に、それ以外は小石川養生所で療養させていました。また、天保の飢饉の際には品川・板橋・千住・内藤新宿の四宿に御救小屋がつけられ、そこに収容しています。地域によっては、行倒人を発見した人や倒れていた土地の持ち主の家が療養の場となったということですから、看病に従事することになった家はさぞかし大変だったでしょう。

それでは、八幡宿村ではどうしていたのか、資料を紐解いてみましょう。文化8年（1811）4

月 25 日に御旅所^{おまびしよ}の側で発見された行倒人は「八幡山」で療養させたと記されており、それ以後の行倒人はみな同じ場所で養生させています。文化 8 年以前はどうかというと、「八幡下」に養生小屋を建て行倒人を収容したとあります。「八幡山」は、国府八幡宮の境内を指し、「八幡下」は八幡宮の下の水田地だと考えられます。

国府八幡宮は八幡宿村の村名の由来となっている六所宮持ちの神社で、鳥居は甲州街道^{こうしゅうかいどう}に北面し、六所宮より東に約 900 m の距離にあります。社殿は鳥居から約 80 m 奥にあり、境内には大木が鬱蒼^{うっそう}と茂っています。

文政 13 年 (1830) の行倒人に関する記述には、字八幡^{あざ}と呼んでいる林の中の日陰に小屋がけをして、行倒人を収容し、昼は 5 人夜は 10 人の番人をつけたとあります。また、安政 5 年の行倒人の際にはこの小屋を「八幡養生小屋」と記しています。

この小屋には番人がおかれ、頭^{かしら}を中心に病人の看病に従事していました。頭は行倒場所での見張りから養生小屋への収容までを一手に担っています。行倒人の病状が重い場合は、養生小屋へ引き取り療養させました。

八幡宿村では遅くとも 1800 年代のはじめには、このような体制が整っており、江戸の町ほどではありませんが、小規模ながら行倒人を療養させるシステムが機能していました。

▼ どこに仮埋葬する？

発見時に行倒人がすでに死亡していた場合、もしくは養生小屋で療養した後に病死した場合には、それらを仮埋葬する場所が必要となります。身元が判明しても、国元まで遺体を運ぶのは大変ですし、火葬にするのは難しいため、八幡宿村内に仮埋葬し、そのまま引き取られることはなかったと思われます。天明 2 年 (1782) に甲州 (現山梨県) の人が村内で自害した際、親族が火葬して引き取ることを望みましたが、神領であることを理由に断り、村内に仮埋葬しています。

江戸の町では、市中で行倒れた死者は小塚原^{こづかばら}にある回向院の下屋敷などに運ばれていました。行倒人に関する資料をみると、遺体は「最寄寺院」に仮埋葬するように命じられています。

八幡宿村でも、宝暦 5 年 (1755) に村内で絵死人^{えいし}があった際、代官所から「最寄寺院」に仮埋葬

するように命じられました。しかし、八幡宿村は村内に寺院が 1 つもないことと、神領であることを理由に、「小人見^{こひとみ}」というところに仮埋葬したいと届出ています。その後、宝暦 12 年 (1762) にでた絵死人の際には、「小人見」を村持ちの墓所と記しており、以後行倒人や変死人は「小人見」に送ることが慣例となっています。

この「小人見」とはどの辺りにあったのでしょうか。『新編武蔵風土記稿^{しんべんむさしむどきこう}』には、甲州街道の北の陸田^{りくでん}の中に、周囲が 30 間 (約 55 m)、高さが 5 尺 (約 1.5 m) の小人見塚という塚があると記されています。また、『武蔵名勝図会^{むさしめいしょうずえ}』には、八幡宮の鳥居際から甲州街道を隔てた北東に、周りが 100 歩 (1 歩を左右の足を 1 度ずつ前に出した長さ = 6 尺とすると約 181 m)、高さが 6 尺の「小人見山」という塚があるという記述があります。また、府中宿の図の中に、塚の上に樹木の生えた「小人見塚」が描かれています (4 ページ図の左下参照)。「小人見」が村持ちの墓所であったことを考えると、この小人見塚の周辺が行倒人など他所者を仮埋葬する「小人見」であったと推測できます。この塚は今ではもうありませんが、文化 12 年 (1815) に描かれた八幡宿村の絵図を見ると、現在の府中の森公園の西側にあったことがわかります。

なお、『新編武蔵風土記稿』と『武蔵名勝図会』の小人見塚に関する記述を比べると、高さの差は 1 尺 (約 30cm) とわずかですが、周囲の長さはかなり異なります。しかし、いずれにせよ小人見塚は大きいけれどもあまり高くない塚だったようです。

最後に、八幡宿村では行倒人の仮埋葬をどのように行っていたかを紹介しましょう。安政 5 年の行倒人の際にかかった費用を記した帳面には、樽・菰^{たる こも}、および称名寺^{しょうみやうじ}の回向に対する料金が記されています。ここから、樽に入れ菰でくるみ、回向^{ほどこ}を施した上で仮埋葬していたことがうかがえます。

このように、八幡宿村では行倒人の療養と仮埋葬に関する慣例がつくられ、それに則して小規模ながら組織的な対応がとられていました。江戸時代の後期には、飢饉^{ごんきゆう}や困窮^{こんきゆう}などから村を出て流浪^{ろうりやう}する人が増え、行倒人も増加しました。そのような事態に対処するために、八幡宿村もシステムチックな対応が必要だったのでしょうか。

坂本長利 「土佐源氏」 資料の世界

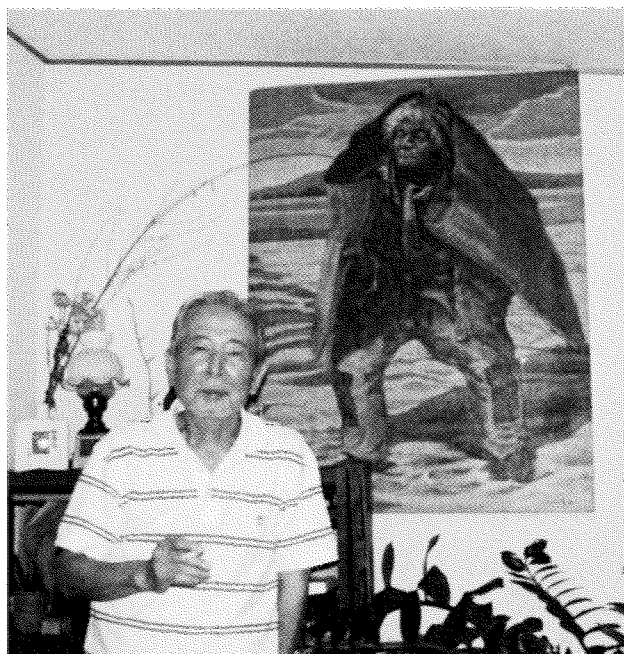
③描かれた「土佐源氏」

府中ゆかりの民俗学者・宮本常一みやもとつねいちの代表作「土佐源氏」とさげんじ（『忘れられた日本人』所収）。その世界にはまった俳優・坂本長利さかもとながとしさん。40年以上にわたり「土佐源氏」を一人芝居で演じてきた坂本さんより、約2,000点の「土佐源氏」関係資料が博物館に寄贈されました。この連載では、その資料をもとにして「土佐源氏」の世界をご紹介します。

「土佐源氏」を演じる坂本さん自体が、別の方の手によって作品のモデルとなり描かれる機会も多くあります。自身の写真集『気』などに代表される写真、ドキュメント番組などで撮影された動画、スケッチなどの絵画類としても…。

今回紹介する資料はそんなもののひとつで、元は1995年に逝去した洋画家・勝呂孝資かつろ たかし氏の夫人より坂本さんに寄贈されたものです。1977年作成の30号（約90×70cm）、そして1979年作成の50号（約115×90cm）の2点。博物館にはこのうち前者の土佐源氏を描いた30号が寄贈されました。勝呂氏は1927年、武者小路実篤むしゃのこうじ さねあつらがはじめた「大調和展」だいちやうわ（東京都美術館で開催）の重鎮をつとめられた方で、1987年には同展で文部大臣賞を受賞するほどの人物です。勝呂氏は「土佐源氏」を演じる坂本さんを気に入っていたようです。

ここに描かれた「土佐源氏」は、正直なところ私の抱く坂本さんによる「土佐源氏」の印象とは



坂本家に飾られる50号の「土佐源氏」と坂本さん

異なっています。ですがそれも当然かもしれません。演じている坂本さんを見た時期も場所も違うし、勝呂氏に見えたものを描いたのがこれらの作品なのだから、似顔絵である必要もありません。様々なイメージで描かれるのが当たり前です。

ちなみに、もう一方の50号の絵（上写真参照）は、坂本家の壁に飾られています。どちらが気に入ったということではないようですが、額のついていない縦位置の作品は坂本宅に、もう一方は博物館へ、と所蔵が分かれました。といっても、それは生き別れということではありません。むしろふたつの「描かれた土佐源氏」は、坂本さんと博物館のつながりを示すものとして、再会の機会を待っているのです。

（佐藤智敬）

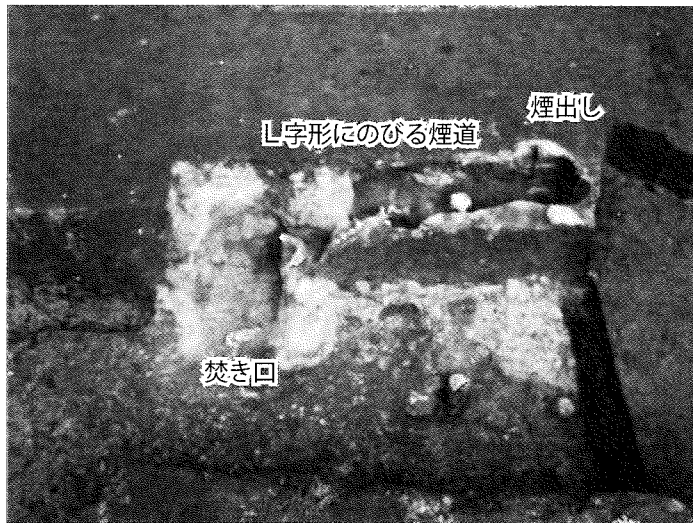


博物館に寄贈された30号の「土佐源氏」

最近の発掘調査

し字形をした 珍しいカマドを発見！

清水が丘三丁目 府中市文化振興課文化財係 西野 善勝



発掘されたL字形竈

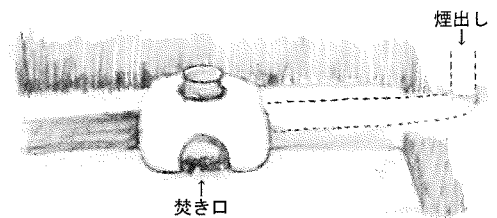
府中市は古代武蔵国の国府が置かれた地で、先ごろ「国史跡武蔵国府跡」に指定された、大國魂神社境内とその東側の一部に中心となる国衙がありました。国府跡を中心とした武蔵国府関連遺跡では、奈良・平安時代につくられた5,000棟を越える数の竈穴建物跡が発見されています。この時代の竈穴建物には、粘土で作られた竈が設けられているのがふつうです。

ところが、最近、清水が丘で発見された竈穴建物跡には、通常とは異なる珍しい形の竈が設けられてました。竈の焚き口に対して直角につけられた長い煙道をもっているのです。このような煙道を持つ竈を「L字形竈」と呼んでいます。

L字形竈は、九州北部地方や近畿地方に比較的多く分布していますが、全国的にみても発見例が少なく、関東・東北地方では、今回の発見で二例目となります。一例目は、これも府中市内になりますが、武蔵台で発見されたもので、武蔵国分寺の創建に関係の深い建物跡に設けられていたものです。なぜこれほど少ないのでしょうか。

この珍しい竈は、渡来系の人々とのかかわりが指摘されています。それは、これまで発見されているものが、渡来系の人々が住んでいたと考えられる集落や、渡来系の人々と関係の深いとされる寺院跡の近くにあるからです。また、類似の竈が、朝鮮半島でも発見されており、オンドル状遺構と呼ばれることもあります。日本列島では4世紀頃以後のものが見られ、ごく初期に作られたものは、渡来した人々がつくったものと考えてもよさそうです。しかし、今回発見されたものは、8世紀末頃と推定されるもので、もっとも新しい例といえます。竈穴建物全体の特徴は、この時期にみられる一般的なもので、竈に長い煙道が付いているところだけが変まっていることから、この竈付の建物をつくる特別な目的があったと考えられます。

古代武蔵国を統治するために重要な拠点であった国府と国分寺にかかわりの深い地域から発見されたことが、この竈のなぞを解くカギとなるかも知れません。



L字形竈想像図

通常の竈は、焚き口から直進方向に煙道（煙の通り道）が作られています。L字形竈は、直角方向に長い煙道が設けられているものです。煙道部分は、粘土で覆われていたと考えられますが、煙突状の煙出し部分の構造はわかりません。

探鳥物語 ③冬の来訪者たち

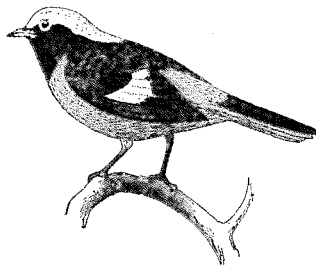
中村武史

「綱川君、夏鳥はまだ見られるかい？」当馬の呼びかけに対する答えは、「先生、ツバメはもう飛んでません…雑木林にはキビタキやセンダイムシクイもいたのになあ…あつ、でもあれ、ほらお腹がオレンジ色で…今までいなかったきれいな鳥が見えます！」

季節は秋から冬へ、肌寒い早朝の郷土の森園内で月例調査に励む少年探鳥団たちは、元気いっぱい双眼鏡を覗きながら口々に観察した鳥をアピールしていた。怜のパソコンに入力済みのデータによれば、例年この時期から冬鳥が姿を現す。観察される野鳥はカラスやスズメのように一年中姿が見られる留鳥に加え、秋から冬に北から越冬のため来訪する種類が冬鳥だ。いわゆる渡り鳥である。国内でも山地と平地、または南北を移動するものもあり、これらも渡りの行動に括られる。よって綱川の言う夏鳥のツバメなどは、すでに南へと戻ってしまった後というわけだ。

当馬が優しい口調で綱川に問いかけた。「腹から腰のオレンジが大変綺麗な鳥だね、他にはどんな特徴があるかな？」綱川が得意そうに、「え〜っと、翼に白い斑があるようです。それと顔は黒で、頭の上は白っぽいかな…」当馬が感心したように、「さすがよく見ているね、そのとおりだよ、では奈津子君、図鑑で調べてみて…ああ、もうスケッチしていたか…凄いな…」「先生、オスのジョウビタキでしょ？」奈津子のセリフを受けて世衣子が続いた。「結構あちこちで見られるわね。林でも草地でも、河原にも！」「正解！もう私が出る幕はないようだね」当馬が舌を巻く。

怜がパソコン画面を見ながら、「私、さっきモズとツグミを見たわ。ほらこの写真と同じでしょ」と言った傍から奈津子が、「怜ちゃんズルイよ、私が最初に教えてあげたヤツじゃん」「ハハハ仲が良いね君たちは。そうだよそれも冬鳥さ、比較的ポピュラーに観察できるよねこの辺りじゃ。さあ、ではあそこの枝に止まっている鳥は渡り鳥かな？」当馬の指示した方向に全員が注目すると、綱川が呟いた。「あの〜、あれヒヨドリじゃないですか、自分でもわかりますよ…一年中どこにでもいて…」「ちょっと待って綱川君、これ先生が調査したこの月別データなんだけど、見て、春夏と秋冬で



ジョウビタキ

はヒヨドリの数が違うんだよ、明らかにこの時期に増えているわ」怜の言葉に全員の表情が変わるのを確かめてから当馬が切り出した。「凄い！私が見込んだメンバーだけのことはあるねえ、よく気が付いたな怜君。そうなんだ、留鳥であるヒヨドリも実は冬の季節、暖かい場所へ一部の集団が渡ってここまで来ているんじゃないかな。山野の鳥ウグイスが季節によって平地に下りてくるように、彼らも日本国内を渡るんだ。漂う鳥と書いて漂鳥と言うんだよ」世衣子が言葉を噛みしめるように、「鳥は翼を持って空を飛び生き物ゆえの習性ですね。まさに旅人…旅鳥ね…」「目的地に向かう途中で日本に寄る鳥を旅鳥とも言うけどね…うん、まあその通りだね」当馬がこの場を締めながらふと思いついたように提案する。「そうだ、みんな多摩川の河原に行ってみない

か。冬鳥といたらカモの仲間が代表的なんだ。果たしてもう来ているだろうか」「行く行く先生、早く向かいましょうよ」誰ともなく一斉に声を揃えた。

…冷たい風が吹きすさぶ中流の河原で、全員身を縮めながら水面を眺める。「どうだい、カモの姿は確認できるかい？」若干声を震わせて当馬が問いかける。「あの〜、ほとんど見当たりませんが、まだ来ていないでしょうか？」綱川が寂しそうに呟く。「いや、もう来ているよ…ただこの場所に少ないんだよ。もう少し上流や下流方向に行けば結構見られると思うよ」奈津子が不思議顔で聞く。「同じ多摩川なのに何故このあたり(郷土の森に沿う大丸堰付近)には来ないの？」うん、と頷いて当馬は語り始めた。「鳥は餌となる魚や水辺の植物が密度を低下させるとすぐに影響を受けてしまうんだね。近年の多摩川は護岸工事や河川改修工事・流路拡張工事が数年に亘って行われ、この辺りは結構いじられているから、カモはもちろんシギやチドリの仲間も変化の多い場所には降りて来ないんだと思うよ」綱川が渋い表情を作りながら、「本来ここは野鳥の宝庫だったはずなのに…人間の都合が優先するのは仕方無いことなんでしょうけど、人も鳥もお互いが歩み寄れる形で川環境が整備されればいいのになあ…」と独り言のようにつぶやいた声が、川風に運ばれていった。